女だから、政治！

Femme Politique

ファム ポリティク

1995年秋号

CONTENTS

撫でてみたマンモス・臨海副都心 …… 2
女に投票しない女たち …… 5
女性議員のページ／清水澄子・佐藤ひろこ ……10
「脱偏差値」で教育が変わるか ……12
まじめな浮動票はどこに行く ……16
書評「いじめと妬(ねた)み」土居健郎・渡部昇一著 ……19

写真・秋本實

行ってきました

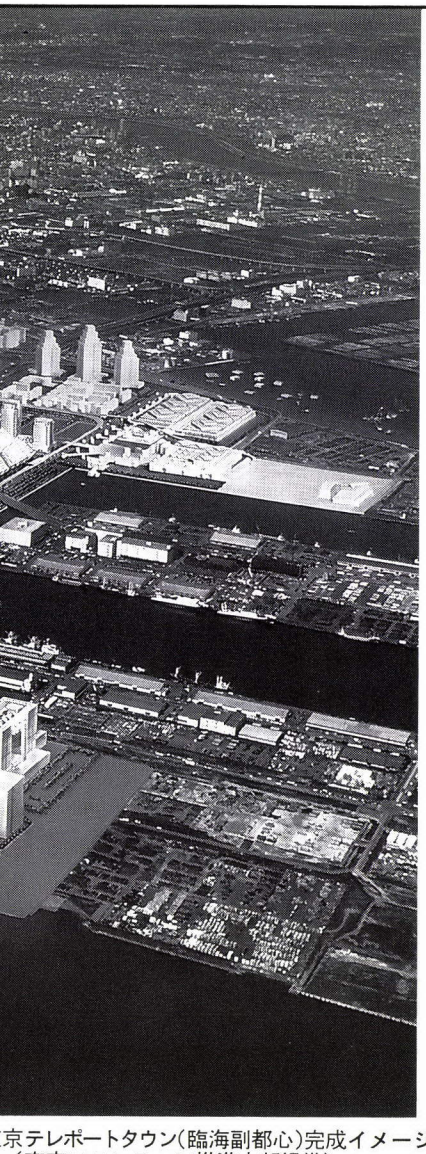
撫でてみたマンモス・臨海副都心

宮前　和

毛穴から汗が噴き出すような酷暑の一日、「東京湾ウォーターフロント視察」（「小野きみ子を動かす会」主催）に参加した。

あれほど物議をかもした世界都市博予定地の跡地。いったいどういう状況になっているのか。百聞一見にしかず。

新宿区から、あるいは意外な遠方からも、汗をふきふき参加者が集まった。総勢約三〇名。年配の女性が半数以上を占めている。平日のせいか、男性の姿は少ない。



東京テレポートタウン（臨海副都心）完成イメージ
（東京フロンティア推進本部提供）

行政視察船

今回のツアーは、都市博の跡地だけでなく、東京湾に集中しているさまざまな施設の見学もかねている。

ざっとスケジュールを説明しておこう。

・八時四五分、高田馬場出発。
・九時四五分、竹芝埠頭乗船場へ。
・一〇時から一一時半まで、「新東京丸」にて、湾内視察。
・一二時、船の科学館にて昼食。その後、展望塔よりウォーターフロント全景視察。
・午後一時一〇分、国際展示場見学。
・二時、中央防波堤外側処分場見学。
・三時一五分、有明共同溝見学。
・四時、東京電力大井火力発電所見学。
・五時四五分頃、高田馬場着。

とまあ、分刻みである。しかし用意万端怠りなく、バスには説明員の方も同乗しておられる。車中では飲物と資料が配られた。

竹芝埠頭には定刻に到着。外国の要人の視察にも使われ、金丸元副総理も乗船したという「新東京丸」に乗る。

乗船してすぐに通されたのは、左右、前方に視界が開けた大会議室だった。窓際には机とイスが置かれ、中央には大円卓を囲んで肘かけ付きの豪華な回転イスが並んでいる。いながらにして視察と会議が両方できるという行政視察船だ。「区役所の会議室より、よっぽど立派だね～」と感嘆の声しきり。

船は、第一航路と呼ばれる海の道を進んでいく。右手に品川・大井埠頭、左手に臨海副都心予定地を見ながら、都内二三区の最終ゴミ処分場である中央防波堤を回って、九〇分で戻ってくるコースである。

臨海副都心（筆者撮影）

大井ふ頭（上部コンテナ、下部水産物）
（東京都港湾振興協会提供）

巨大な胃袋

窓外の景色に目を奪われた。大井コンテナ埠頭のクレーン群が空を圧してそびえ立っている。全長二三〇〇メートル、八バース、一八基のコンテナクレーンを有する東京港の代表的な外国貿易コンテナ基地である。

大井埠頭にはコンテナ埠頭のほかに水産物埠頭、食品埠頭がある。水産物埠頭では北洋、アフリカ、ニュージーランドなどからの遠洋冷凍魚介類を取り扱い、食品埠頭では主に小麦、青果物、水産物などの輸入品を扱っている。

よく日本人の食生活は世界中の食料をかき集めて成り立っているといわれるが、その最大の集積地が東京港だ。首都圏三千万人の胃袋を養うことは言うに及ばず、近隣の北関東、甲信越、南東北などへも影響力を持っている。

大井埠頭に立ち並ぶクレーン群は、青海コンテナ埠頭、品川コンテナ埠頭と共に、世界各地から運ばれてくる物資を日夜途切れることなく陸揚げしているのだった。

東京湾が日本最大の港になっているということは、うかつにも知らなかった。食料の七〇%を輸入に頼っている日本。自給体制はもう、ほとんど破綻しているといってよい。

ラビ・バトラは「貿易が国をほろぼす」といっているけれど、厖大なエネルギーを使い、労力を使って外国から食料を輸入しているシステムが、巨大なマシーンとして動いている姿を実感した。

入港船舶数は約五万隻。輸入割合は、サケ・マスは全国輸入量の五二%、エビ五七%、牛肉三三%、アルコール四五%となっている。

埠頭は車を輸入する埠頭、食品を輸入する埠頭、と品物別になっている。全部で二二。

イメージだけが先行

昼食をとった「船の博物館」から見晴らした跡地は、まだまだ空地いっぱいという印象。フジサンケイグループの本社や、テレコムセンターなど、出来上がっているものは思いのほか少ない。

昼食後、バスで臨海副都心（東京テレポートタウン）の国際展示場へと向かう。

臨海副都心計画は、「国際化、情報化の進展に対応」して、二一世紀にむけた「多様な機能を備えた理想的な都市」を青海、有明、台場地区の埋立地四四八ヘクタールにつくろうとする一大プロジェクトである。

国際展示場では、有明南地区に建設される東京国際コンベンションパークの中核的存

在として二四万三四〇〇㎡の敷地に展示ホール、屋上・屋外展示場、各種会議施設、レストランなどが予定されている。

見学をする前に、入口横にあるプレハブ棟の会議室で、東京都財務局職員から説明を聞いた。国際展示場の縮小模型が置いてあり、プロモーションビデオを見せられる。

「東アジアの中心」「巨大なマーケット」「ビジネスの中心」「アーバンライフの楽しさあふれる街」「豊かな生活」など、ビデオから流れるのはイメージの先行した抽象的な言葉ばかり。

臨海副都心という新しい街が、都民の生活にどんなふうにかかわり、どうつながってくるのか。真に〝豊かな生活〟とはどんな生活なのか。まったく説得力のないビデオだった。

さて、いよいよ見学だ。見学者は全員ヘルメットを着用して、晴海の国際展示場の一・五倍の広さ、東洋一の規模だという国際展示場の一角、東展示ホールへ入る。

一辺が九〇メートルの四角い建物の中は、職員の説明が聞き取れないほど、ガンガンに音楽が鳴り響いて、印象に残ったのは、高い天井にガランとした空間だけだった。

トイレで、六〇代とおぼしき女性が、「ガレリヤなんて、〝連絡通路〟のほうがスッとわかっていいのにねえ」「アクセスなんて横文字を使わないで、もっと日本語を使ってほしいワ」と話している。

まったくその通りである。横文字を使えば「ハイセンス」で「ファッショナブル」だろうという発想は陳腐だ。安直すぎて、醜悪でさえある。それこそ、二一世紀には「巨大なマーケット」になるであろうシルバー層をどう考えているのだろうか。

観光バスが月一〇〇台

次は、中央防波堤埋立地の見学である。

バスを降りると、ぷぅーんとゴミの臭いがした。埋立ては、三メートルのゴミの上に五〇センチの覆土をするサンドイッチ工法だ。東京二三区内の、清掃工場で焼却された可燃ゴミの残灰、破砕された粗大ゴミ、事業系一般廃棄物、産業廃棄物など、すべてのゴミがここへ持ち込まれる。

外側処分場の展望台（お立ち台）へ案内された。展望台といっても、少し小高い丘というか、土手である。そこから見える風景は海面と、黒いポリ袋がヒラヒラ舞う埋立地のみ。この地の果てのような処分場にも月一〇〇台の観光バスが訪れるそうである。

最近は不景気でゴミが減ってきたとのこと。予定では、来年三月に外側埋立地も満杯になってしまうはずだったが、もう少し延期される見通しだ。「処分場の延命化」は清掃局の至上命令だが、次の埋立予定地は中央防波堤外側処分場のさらに外側に予定されている。

しかし以前には次の候補地などなく、みんなオロオロしていたという。

中央防波堤埋立処分場（東京都清掃局提供）

もっと生活者の視点を

最後に、東京電力大井火力発電所。

うだるような暑さのなか、エイヤッと気力をふりしぼって発電所へ向かう。しかし待っていたのは屋外の熱気以上、サウナのような暑さだった。冷房の効いた会議室で説明を聞いているぶんにはいいのだが、一歩発電所内へ踏み込むと発電機から放射される熱気がすごいのだ。

壁一面にコントロールスイッチが並ぶ管制室？は冷房が効いていて、制服をきた若い社員が働いている。

地獄の熱さがたちこめる現場ではたらくのは中年の下請け会社の労務者。私たちが見学したときは、丁度休憩時間で、冷房してあるガラス張りのブースのなかで、目白押しに座って休んでいた。ここにも下請け残酷物語がある。

各階フロアー、中央操作室、屋上の展望台と見学して、やっと本日の日程は終了した。よろよろしながらバスに乗り込む。

ああ〜、長くて疲れた一日だった。体力面もさることながら、精神面での疲れのほうが重く澱んで身体に残る感じなのだ。

帰りの車中では、中央防波堤埋立地を見たショックや、あんな建物をつくるよりももっと住宅を、という年配の女性の声が多く聞かれた。

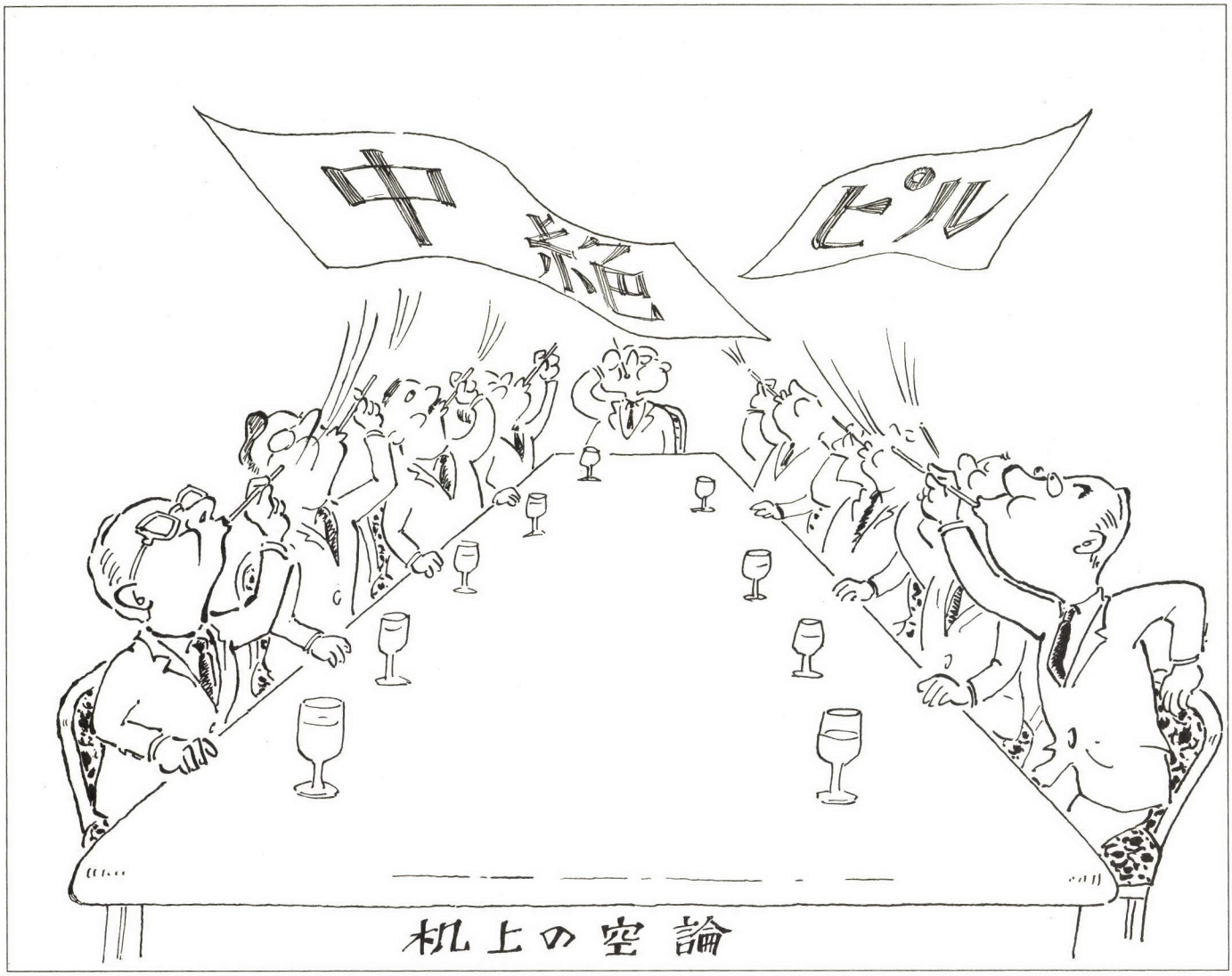
今回の東京湾、ウォーターフロント視察は、男たちの「大きいことはいいことだ」式の旧態依然とした発想、上昇志向を浮き彫りにしたツアーだったと思う。

巨大化する一方の都市開発。都庁が建設されたころから、鬼面人を威かすというタイプの建造物が東京の各地にはびこりはじめた。

技術だけが突っ走り、人間の生活は片隅においやられる現代の「バベルの塔」が各地に作られはじめている。

自然と人間はどこにあるのか。こんな環境のなかで、人間は絶対に幸福には生きられない、という実感をかみしめた一日であった。

大井ガスタービン
（東京電力株式会社提供）



女に投票しない女たち

司会　田中喜美子
小倉　徳子（損害保険代理店経営）
梶本　玲子（日仏女性資料センター）
鈴木由美子（フリーライター）
堂本　暁子（参議院議員）

政治家は男でも女でもいい？

司会　この間女性を対象に政治についてのアンケートを取ってみたら、別に女性の政治家でなくてもかまわない、いい人だったら男でもいいという意見が、三分の一くらいあったんですね。回答者は比較的政治意識の高い人たちです。もちろん全体としては女性をどんどん出さなければという意見のほうが多いのですが、この結果には驚きました。そこで背景を探ってみようと、この座談会を企画したわけです。まず、政治家は女でなくてもという意見の方から。

小倉　私は、なんで女でなくてはならないのか、同じ人間が女の形や男の形をかぶっているだけだと思うんですね。着るものによってみたところは違うと思うけど、この人、間違って女やってるんじゃ

ないか、男やってるんじゃないかという人ってずいぶんいますよね。男だから女だからって分けるんじゃなくて、適性のある人がなればいいと思う。今の時代は、女が出かかっている時代とは思うけれど、女でなければとは思いません。

鈴木　私は団塊世代の一人です。他の世代の一倍半くらいの人数がいて、高校入試から老人ホームまで社会問題を引き起こしていくグループです。私は、女でなければ分からない問題ってある気がするんです。私たちは、育児休業法ができたときにはもう四〇代で間に合わなかった。ミセスで完全に経済的自立ができているのは、教員夫婦とか公務員夫婦とか限られた人だけ。主婦として一〇三万の壁の中で働くとトクとか言われるけれど、いま破綻主義離婚の時代になって独身に戻ったとき一〇三万円では自分一人を養えない。女性を一個人、社会人として扱えば妻の座は守られないし、専業主婦にへつらう政策が取られれば、離婚の自由がなくなる。このへんの問題を、自民党から共産党まで男の政治家はまったく理解できないんですよ。男女共通に取り組む課題もあるとは思いますが、人口の半分を占める女性について、男はまだわかりはじめてもいないなと思ってるわけです。

梶本　私は、女性を政策決定、意志決定の場に参加させたいと積極的に思っています。ただ女性なら誰でもいいというわけではなくて、一九七〇年代の女性運動を経て八〇年代に欧米先進国では女性政策ができるようになった。その中で、女性が実力をつけてきた以上、能力のある人、適材適所という人を選びたいということです。私はフランスに留学して、フランスの運動体や研究者の動向、行政やECの動きを勉強して日本を見たいとやってきたわけですけど、今一九九五年からは、パリテ・ポリティクといって、政治の中を男女半々にしたい、女性を進出させたいという運動が起きている、それを日本でも起こしてみたいと思っているんです。

司会　女性を議会に出したい人が多くて、困ったな（笑）。小倉さんのご意見は、男・女の区別は基本的なものでなく、最終的には同じになりうるんじゃないかと。これはフェミニストの中でも意見の別れるところで、政治とは離れるけれど、深い問題提起だと思うんですよ。男は女を、女は男をわかるようになって、人間として平等な世界をつくりうるという考えがあるんじゃないんですか。

小倉徳子さん

小倉　私は何度も夫と別れようと思ったけれど、別れるも一つ、続けるも一つ、続けるならよりよく続ける方法を工夫してきたわけですよね。自分を変えたり、相手も変わってきたりしたのですが、そのなかで、自分がしたいことを相手が代わりにやってくれるってことがわかったんです。

司会　えっ、それなに？

小倉　私が消費者運動をやりたいとしますよね。夫にこういうところに問題があると話すとじっくり聞いてくれるし、聞いたら動いてくれる。男と女が敵対する存在という前提がなくても、男が充分女の意向をくみあげる場合だってあると思うんですよ。

梶本　フランスでも、男でも女でもいいっていう問題があるんですよ。人口の五一パーセントが女性なのに、女性が女性に投票しない。全世界これと同じような悩みがあると思うんですね。同性がまだ経験不足で信頼がおけないとかがあると思うんですね。六、七〇年代に世界的な大きな運動が起きてきたとき、アメリカやヨーロッパ、日本、表にでなかった東欧やアジアにも同じような問題意識が生まれてきたわけですね。どうもわれわれ女性には平等感が少ない、と。それに気づいて、国連を中心にした国際会議が行われ、先進国では平等に近い法制度が確立されてきた。それでもまだ、意識の世界に平等感が少ない。そこで、重要な意志決定機関に女性を送りこもう、マスメディアのつくり出すイメージを変えていこうという動きになっている、政治の世界に女性の人材を送り込みたいというのが国際的な動向になっていると思うんですね。

女の言葉が通じない国会

司会　堂本さんには、議会に女がいる意味を具体的にお話しいただきたいんですが、「さきがけ」の中で、ご自分でなくあえて若い男性を女性局長に据えてやっておられる。まず、そのへんのお考えを。

堂本　小倉さんのカップルの中で起きていることがオールジャパンなり日本の国会なりで可能であったら、とってもラクだろうと思うんです。だけど、男は女の言うことに聞く耳を持たない、女子どもは政治の場や意志決定の場に出る必要はない、女は家庭に入って子育てをしていればいいという考えが根強いんですね。私の場合、私が男を説得しようとしても言葉が通じないことがあまりにも多い。男が女性局長になっているほうが、男の言葉、男のルールで話すから説得しやすいってことがある。

もちろん私は女性議員が増えなければと思っています。TBSにいたときは、女を増やせと切実に思わなかったのですが、国会に出てみて、そこで言っていること、決まっていくことが、生活から遊離し、現実と落差がありすぎるのに驚いたんです。男性議員といえば官僚で局長になった人とか、市会議員県会議員で議長になって出てきた人とか、労働組合でトップになった人とかが多いんですね。そうするとふつうの人の生活感がわからない。

基本的に日本では、男性と女性の問題意識の乖離が大きすぎると思うんです。今度の選挙で、私が女性の問題を「さきがけ」の一番の基本政策として出してくださいと言ったら、いや個別政策は別につくるから、という発言がすぐに出るわけです。女性の問題は「個別」で、経済政策とか行政改革が政治の本質だという。でも私に言わせればさかさまで、女性政策のほうが本質かもしれない。でも男は右も左も老いも若きもそういう発想をしない。

もうひとつ言えば、男性の価値観でやってきた科学や経済発展がいま壁にぶつかっている。公害列島になったり、天然資源がなくなったりしてる。違った判断基準で政策を見直す必要があるのに、線路の上をまっすぐ走ってきた人はそこから降りてみるのが難しい。とすれば、マイナーな差別された立場にあった女や障害者や子どもの視点で作り直すしかない。この視点に立てるなら男でも女でもいいんですが、日本の中央官僚や政治家には、そういう男はゼロに近い。としたら、日本ではやはり女かな、と。

梶本玲子さん

しかし閣僚の半分が女で、ブルントラント総理大臣も女であるノルウェーでも、八〇年かかってこういう立場を作ったが、一刻でも油断したらもとのもくあみになってしまうと言っている。弱者の視点、人間・生活・環境を言い続けて女を出す努力をし続けていないと駄目だという。ノルウェーの男は女にずいぶん教育されているけれども、やはり男たちは従来の発展路線を走ってしまうという感じです。

日本の場合は、私などがあちこちに行かなければ、いろんな会議が常に男だけですよね。政党に女がいてもトップに持っていかない、労働組合もトップを女にしない。女がリーダーシップを取ることに、すごい抵抗感があるんですね。

梶本　まさにそういう視点を持っていれば、男女どちらの政治家でもいいのですが、世界的に男でそういう人は少ないし、世代間の違いも大きい。若い世代に希望がないとは言えないから、運動として男の意識を変えていかなければならないと思いますね。

生活感覚の乏しい男性たち

堂本　経験から言うと、行政改革の一二人のプロジェクトで一年間女は私一人だったんです。男の人たちは行政改革には山のように言いたいことがあって、機関銃のようにしゃべる。でも私が言うのは男性の言うこととちょっと違うんです。私は、別に男の人の言うことに反対というわけではないんですが、たとえば男性は公団住宅については、たくさんウサギ小屋を建てたがこれからは質を考えなければいけない、また役人の天下り先でしかないから民営化しろとワーッと攻撃する。それには賛成ですが、私が言うのは、全部階段なのが気にいらない、なぜエレベーターがないのか、今から二二%が高齢者になることはわかっているのに、どうしてああいうもの建てるんだというわけです。男だって八〇歳になれば車イスに乗るし障害者みたいになるのに、なぜか男からそういう発想が出てこない。

小倉　ビルにエレベーターをつけるなんて、政治の領域なんですか。

堂本　私は政治の根本の部分だと思う。それに建設省なんて女はほとんどいないし。おまけに今は入口に段を上げて差をつけるのが建築家の間で流行してて、車イスで通れない。段差をなくし、車イスが入れる広さの玄関にしなくてどうするんだと思うんです。最初からそうしておかなければ、今から二〇年経ったときいったい何%がそこに住めるんだ、と。

家族単位行政で女は無権利に

堂本　また農業の問題。農協なんかにはいまだにものすごい男女の差があって、農地の権利は、女が持ってはいけないなんて、私知らなかったんですよ。

司会　えーっ、そうなの？

堂本　民法で女でも土地の所有はできますが、農協でのことなんです。それがやっとこないだ、女でもいいというのが通ったんです。

小倉　同じようなおかしなことありますよ。私の国民健康保険、私が稼いで保険料払っているのに、主人の名前なんですよ。

司会　そう、あれ腹立つのよ。

堂本　まさに農業がそうで、かあちゃん農業なんだから、女の人が代表で農協に出てきてお金を借り

たりしてもいいのに、女には権利はないということだったんです。日本というのは、もう、すごいですよ。

梶本　社会の基本単位を家族にするか個人にするかという考え方があるんですが、日本では、役所や政治家に家族単位という概念が強い。女性が個人として男性と対等に認めてほしいという考えが導入されたら、自然に社会のすべての機構が変わっていくと思うんですよね。

司会　考え方だけでは無理でしょうけどね。

梶本　民法改正について法務省の動きは面白いと思うんです。担当者と話してみたら、家族についての離婚の破綻主義を採用するなどヨーロッパの立法化の動きを参考にしているという。日本自身で揺らいでいる問題について外国を参考にしていけば、日本での考え方の枠組みも変わっていくんじゃないか、男性も気づきはじめているんじゃないかと思うんです。

鈴木　日本の農業を大事にするという革新政党の男性政治家の集まりに出たことがあるんです。そこでもすべて家族単位の発想で、家族単位というのは男性単位ということなんですよ。そこで私が手をあげて、若い女性が農業でがんばろうと思って農家のお嫁さんになって一五年間コシヒカリを作ったりの社会的労働をして、さあ離婚して農村を出ることになった、そのときこの女性個人に厚生年金や共済年金に匹敵する年金の積立ができていますか、農業者年金の中にはそういう制度がありますかって聞いたら、あれは世帯単位だからありません、という返事。そこで私が言ったのは、じゃあ、日本の農業に若い女性が参加したらうっかりすると人生を無駄にすることになりますねって。（笑）その男性議員はそんなこと考えたことなかったようです。いろんな問題を個人単位にしていくには、そこにいる女性が離婚したらどうなるかを聞いてみることだと思うんです。こういう問題をトータルに捉えるには、女性が政治の世界に量として進出しなければと思います。

女性議員も玉石混淆

鈴木由美子さん

鈴木　ただし、これまでの私たちの女性議員に関する見聞というのがとても貧しい。私が初めて女性議員を見たのが小学校のときですが、人口二〇万の町で市会議員選挙があって、立候補予定者が突然バッタリ死んでしまった、そのとき奥さんがすぐ出馬してあちこちで涙を絞らせてトップ当選しました。そんなことで、脇に夫の棺桶がないと女性は議員になれないというのが刷り込まれてしまった。だいたいその人が出たのは息子が成長するまでのツナギという役割があったからでしょう。

　中央では、中山マサ厚生大臣、近藤鶴代防衛庁長官、テレビの時代になるとクイズ番組で優勝した山東昭子が企業ぐるみ選挙で出たとか、扇千景だとか。国際婦人年頃までの女性議員は、女の視点とほど遠いところにいた感じです。

司会　女が出した女じゃなく、男が連れてきた女ですよね。

堂本　どうしても女性は子育てで中断されるから、社会性のトレーニングが要るところはあるかもしれない。ノルウェーの女性議員を増やしてきた人が言った「国として全体のレベルが落ちることを恐れてはいけない」という言葉、これが鮮烈に印象に残っているんです。男と競争したら社会的能力で必ず男が勝つと。

　私は今いい意味で緊張しています。なぜかというと本当に国のことを決める場にいる。今度、院内総務会のメンバーになってくれないか言われて、新しく出た人を出そうとしたら、やはり新人ではなくて堂本さん出てくれないかと言われた。こんなとき、女が引っ込まないほうがいいと思うのね。それで、でしゃばるのは嫌だけど、やることになったらやりますと返事したんですが、なぜかというと、なかなか女はそこまで登りつめられないんです。土井さんは議長になるのに二〇何年かかった。私はたかだか六年ですけれど、これで引ければまた女はイロハのイなんです。

　ノルウェーの人のいうように、一時レベルが下がっても、女たちにチャンスを与えれば、その中からブルントラントみたいな世界に通用する女性政治家が育つ。

　私も政治家じゃないから六年前にイロハのイからスタートしたんですが、これはこの場で発言しようとか、この問題は党へ持ちかえろうとか判断できるようになり、さあこれから仕事ができるというところにきて、今度当選できてとってもうれしかったんです。

一同　本当にそうですよね！

有能な人材を政界に出すには

小倉　堂本さんに一つ質問があるんですが、あの六年前の社会党のマドンナ旋風、女性を政界にたくさん出すのは賛成ですが、マドンナというイメージがどうも・・。

堂本　あれは、マスコミがつけた

言葉ですよね。

小倉　男が選んだ女が出るという感じですが。

堂本　いやあのときは土井さんが選んだから。あのときの議員が、今度相当落ちたけれど、何人かが残ったんですよ。

小倉　選挙制度が、女性が政界に進出しにくい原因になっていませんか。比例代表制の場合、女性が名簿の上位に来ないとか。

堂本　いや、政党はすばらしい女たちに声をかけつづけているんですよ。社会党もさきがけも。だけど、女は男より政治に対して純粋に考えているから難しいんです。男の人は生まれたときから政治家になりたかったんじゃないかと思うくらいなんですが。女は声をかけても受けていただけない。あまりにも、政治の場が悪いから。

梶本　有能な人材は、男女とも政治に足を向けなくなっているんじゃないですか。マスメディアが政治のイメージを悪くしている面もある。

堂本　女に限らず男も、深くものを考える人が出にくいのが日本の政治なんです。

司会　法律を変えて、現在の職業を保ったまま立候補して、落選してもスッと戻れるようになれば、いい人が出られるんじゃないかな。大学教授のままで、とか。イタリアがそうでしょう、そうなるとインテリが出られる。

梶本　フランスではシラクさんが市長やりながら大統領選に出てましたし、女性の権利省の職員が緑の党から出るとかもありました。

鈴木　東京でも杉並区議会に、職業を四年休職して出た女性がいますよ。

堂本　それが制度になれば、有能な男もいっぱい出てくる。

梶本　今度の第二次村山内閣、期待していたんですが、女性の大臣がいなくて、年齢層が高かったというので驚きを感じますよね。ただ、さきがけから出た民間人の宮崎勇さんは、NGO女性部会の副議長かなんかやってるから、せめてあのへんから女性問題の発想が入ってくればいいと思うんですが。

堂本暁子さん

マスとしての女性議員を

堂本　とにかく絶対数として女を増やすべきなんです。女性の国会議員の比率が世界の一四九番目という順位はあまりにも低すぎる。

小倉　そんなに低いんですか。

鈴木　世界にこんなにたくさんの国があったのかと思うような数字ですよね。

堂本　そう、だから、避妊や中絶の問題も男ばかりで決めている。これは相当に気持ち悪いことですよ。女性が入れば、何年かの間に女性の人材がサーッと育つわけ。その発想が日本にはないと思う。今度の閣僚でも女性の適任者がいないとか言う。女がずっと虐げられてきて、どうして突然変異みたいに、男の基準による大臣適任者が存在できますか。

市川房枝さん一人、山口シズエさん一人でなく、女のマス、女のピラミッドができないと何もできない。でもたとえ二・七%でも、国会議員が前より増えました。女性の労働とか健康とか、男性がやってくれない問題があるわけ。

日本でも八五年に女性の差別撤廃条約を批准した、それに基づいていろんな国内法をつくっていかなきゃいけない、女の議員がいればこそ頑張るわけですよね。育児休業法も、土井さんが女性の議員をバーッと増やしたから初めて通ったわけ。これまで、田中寿美子さんが何十年もかけて九回も出しつづけてきたのに、出してはつぶされ、出してはつぶされ、土井さんのときに参議院が与野党逆転して女性議員の比率が一三%に上がり、役人に都合よく書き換えたものだったけれどやっと通った。

保育所の問題でも、男の都合だから、無認可の駅前保育所とかをやっている。母親にすれば、ゼロ歳児三人に保母さん一人というような保育内容こそ大事なのに、企業的発想に走ってしまう。

この間女のNGOがみんな署名して、厚生省に避妊やピルの問題も扱う「女の健康課」をつくってほしいと陳情したのですが、こういうことは男は絶対やらないし、やるときはさかさまにやるんです。与野党とも人口を増加させるために避妊の方法は考えないほうがいいとか言い出す。樋口恵子さんが、女が月一回どんなにハラハラしているかわからないのかと怒っておられました。こんな問題も、女なら能力の有無にかかわらずだれでもわかることなんです。

鈴木　女を増やせば、玉石混淆でも、玉の人がどんどん伸びてくるし、石から玉に化ける人も出るかもしれない。マスとしての女の存在が要るということですね。

小倉　二〇年かけて女を育てるという発想が大事ですね。

司会　それでは、このあたりで。どうもありがとうございました。

まとめ・鈴木由美子

清水澄子さん

鈴木　由美子

数年前まで一部の人しか知らなかった従軍慰安婦問題を、今は日本人のほとんどが認識するようになっている。

そのきっかけを作ったのが清水さんだった。九〇年に韓国教会女性連絡会という女性団体から電話で訴えを受け、外務省に書簡を提出し女性議員との懇談の場を作った。それが慰安婦問題を国政の場に持込んでいく発端であった。清水さんたちは事実を認めようとしない政府を追いつめ、国家が関与してなされたことだと認めさせるにいたった。

慰安婦問題に関する討議の場における、男女の意識の差にはすさまじいものがあった。軍隊の慰安婦というのは当時存在した公娼制度と同じで、お金を払えばそれでいいではないかという発想の男性議員が多い。田畑にいる女性に銃をつきつけてトラックに乗せる「拉致監禁」をし、また洋裁や炊事の仕事だと偽って募集して、連日の性暴力にさらしたことに痛みを感じることの少ない面々であった。清水さんに対して自民党の男性議員から「一度も金をもらわなかった者だけ集めてこいよ」と罵声が飛んだこともある。

清水さんはこの問題を、戦争被害の一種というだけでなく、女性に対する人権侵害だという認識を持つべきだと訴えた。九三年になって「女性の名誉と尊厳を著しく傷つけた」と河野洋平官房長官が発言、清水さんたちの主張がようやく通った感がある。

清水さんの「女の視点」は、すでに半世紀のキャリアを持つ。結婚させようとする親から逃れて一九五一年に福井県総評に勤めたのが、女性問題との出会いであった。

福井県には専業主婦は少なく、みんな朝から晩まで働いている。農家のお嫁さんは、小さい子どもをあぜ道に置き、零細繊維業者の主婦は工場の中に赤ちゃんを寝かせて働く。家事育児も仕事も目一杯やって、女性の発言権は皆無に近かった。

やがて清水さんは、全県の働く女性を組織した「福井県働く婦人の会」の事務局長となり、保育所づくりの大運動を展開、市町村・県・国に訴えることになる。保育所がなければ、ガチャガチャと騒音を立てる織機のそばに置かれた赤ちゃんたちは耳を痛めて難聴になってしまう。家内工業では夜も機械を止めるわけにはいかない。乳児保育と夜間保育は、福井の女性の切実な要求項目であった。

のちに、TBSの堂本暁子さん（現参議院議員）がベビーホテル問題を追い厚生省に取材した際「昭和三〇年代に福井の婦人運動に押されて、いよいよ乳児と夜間の保育を始めようと条文まで作ったことがあったが、他の省の反対でつぶされた」と説明される。堂本さんからそれを聞いた清水さんは、日本海側の女たちの運動が、国の中央を揺るがしていたことに改めて驚いた。

田中寿美子議員の秘書として上京する際、夫君に首都圏へ転職してもらい、子ども二人も連れて一家で転居。夫君の勤務先の栃木県と永田町との中間地点大宮市に居を定めるなど、既婚女性のぶつかる問題をクリアしてきた。

八三年から田中寿美子さんの後継者として選挙戦に挑み、八九年参議院比例区から初当選。女性議員仲間とともに、九二年に育児休業法を通し、削られてしまった休業中の所得保障を九四年の同法改正の際には二五％まで回復させた。パート労働法や介護休業法をよりよいものにしようと力を尽くしている。

また、優生保護法と刑法を改正して、堕胎罪をなくしたいのだが、簡単にはいかないだろうと思っている。カイロの人口会議でカトリックやイスラム勢力の抵抗が強かったのと同じく、日本も保守勢力や新旧宗教勢力の壮絶な反対が予想される。攻め方を慎重に考えねばならない。清水さんは、優生保護法の時限立法部分を改正する時期を捉え、付帯決議の中に「リプロダクティブヘルス・ライツ（性と生殖に関する健康・権利）について、その正しい知識の普及に努めるとともに・・」の文言を入れさせた。この決議がされた九五年六月以降、日本ではその概念を認めないとは言えなくなった。

最初の布石がやがて大きい流れに。清水さんは参議院二期目にも着実に成果をあげつつある。

清水澄子（参議院議員　日本社会党・護憲民主連合）
一九二八年大阪府生まれ。福井県働く女性の会事務局長、田中寿美子秘書を経て、八九年参議院初当選、九五年再選。労働委員会理事など。

佐藤ひろこさん

当選直後の青島都知事が、都市博開催をと迫られていたとき、地元中野の女性たちが「都市博中止、青島がんばれ」の看板を掲げて署名活動を始めた。その中に、中野区議会議員二期目に入った佐藤ひろこさんの姿があった。

反応はすごかった。高校生や赤ちゃん連れの夫婦など若い人が次々に寄ってきて、二時間で千人の署名が集まる。カンパ箱を用意したら、ポンと三万円入れる人もいた。

都市博中止を求めた佐藤さんたちには、臨海副都心開発を始めとするゼネコン政治への強い批判がある。四年間区議として働いてきた中野区でも、区外の土地買収をめぐる問題に最も大きなエネルギーを注ぐことになった。

区議になってまもない九一年六月、所属した文教委員会に、区のスポーツ・学習施設を建設するため、山梨県上野原町の土地二六ヘクタールを購入するという計画が出された。過密都市中野区はスポーツ施設不足なのは確かだが、そんな遠くにスポーツ施設を買う必要があるのだろうか。

その年一一月に、TBSテレビが上野原用地をめぐる疑惑の取材にやってきた。スポーツ施設用地の六割を買収してきたM社は、東京佐川急便の債務保証を受けている暴力団系企業だという。このテレビ取材に対し、区長は予定通り購入すると答えた。驚いた佐藤さんが調べてみると、佐川急便本社から暴力団系企業リストの中にM社は入っているという答えを得た。

他の自治体ならば、テレビが取り上げた段階で議会は大騒ぎになる。しかし、中野区では違った。当時は社会党や共産党を与党とする「革新自治体」であり、与党は区当局の意向に協力するという姿勢を取る。社共の区議が、この土地の購入を支持するという異様な構図ができていた。

調べてみればみるほど、疑問ばかりの用地だった。疑惑のM社のほかに多数の地権者が入り乱れている。長く砂利採掘場になっていた劣悪な土地を埋め戻す問題がある。水道や道路がない。風致地区に指定されているので、問題のM社としては民間開発をすることができず、自治体に売るしかないらしい。しかし、それをなぜ赤字に苦しむ中野区が買わねばならないのか。

当局は区民の要望が強いというが、PTAでバレーボールをしている母親たちに聞くと、子どもが学校から戻る時間までに帰れる近所でスポーツをしたいという。中野区の中の誰の利益、あるいは誰の利権が優先されているのだろう。

佐藤さんはこれまで教育問題に取り組んできた人。教育委員準公選制のある中野区で、障害を持つ子が地域の学校に入学できるよう運動してきた。土地売買問題については、一からの出発であった。

佐藤さんが用地経理課に行って用地全部の登記簿を見たいというと、担当者は段ボール一杯の書類を持ってきて、お見せしますが新人区議サンにわかりますか、という態度だった。何枚かを見ていくうちに一五〇億円の抵当権がついている土地が見つかったので聞いてみると、担当者も「エーッ一五〇億円？」と驚いた顔を見せる。細かく目を通していなかったのではないかと思われた。用地の検討より早く購入の決定だけが行われたことがここでもわかった。

しかし、議会には賛成派が多すぎた。人数の少ない民社党と、政党に属さない議員を集めた小会派と、その会派にも入らなかった佐藤さんとが、議場で保革からの罵声を浴びながら買収ストップを訴えたが、九三年春に用地買収費が議会を通過してしまった。

大きな会派に属していないと無力なのだが、佐藤さんはこれからも一人で議会を見ていきたいという。何でも同じ意見でまとまっているのでなく、個々の問題を自分で考え同じ意見の人々と組んだほうが納得のいく活動ができる。土地問題で思いがけず民社党と共闘できたように。

九四年初めに教育委員準公選制廃止を決めた中野区は、その後自民党から共産党までが手を組んだ稀にみるオール与党の自治体となっている。市民が行政チェック機能の弱まりを危惧している現在、佐藤さんのような無所属議員の働きは、ますます大きな価値を持つことだろう。

佐藤ひろこ（東京都中野区議会議員　無所属）

一九五一年大阪府生まれ。東京女子大卒。育友会教育研究所講師を経て「どの子も地域の学校へ」の運動に取り組む。九一年中野区議会初当選、九五年再選。厚生委員会所属。

廃止はしたけれど

「脱偏差値」で教育が変わるか

佐藤ゆかり

学校で学んだはずの勉強内容はすっかり忘れてしまったが、高校三年の秋に初めて受けた業者テストは妙に心に残っている。

学校内での順位ではなく、北海道のなかでの自分の学力レベルがはかれるテストの存在に、いささか圧倒された。と、言っても今ほどその数値に重要性を感じてはいない。一瞬たじろぎはしたがそれはそれ。これは目安と勝手に解釈して、結果はすぐに忘れた。

あれから一八年。あの偏差値がこれほど学校に浸透しようとは、あの時だれが考えただろう。

教育の影に政治あり

振り返れば教育はいつも時代を追いかけ、政治に取り込まれている。

一九五六年、直接公選制だった教育委員が国の任命制に変わり、文部省は全国の教育委員会を通じて学校への管理を強化した。

つづいて教師の「勤務評定」、主任制の導入と学校内の管理体制が着々と敷かれていく。教科書はもちろん、文部省のOKが出なければ学校に登場できない。

子どもたちにとっては国の流す情報が歴史のすべて。太平洋戦争が侵略なのかどうかを考える機会もほとんどなく、授業はボリュームの多い教科書をこなすのがやっと。

学校の管理は文部省を頂点に完全に定着、教育はまさに国の一大事業となり、その姿は今も何一つ変わっていない。

そして、高度成長……。都市への人口集中と戦後ベビーブームの子どもたちの進学期が合致し、文部省は考えた。高校を新設するなら、技術革新で財界の需要が高い産業人材を育成する職業高校はどうだろう。

生活が豊かになった親は考えた。高卒で即子どもが働かなくても食べていける。ならば、進学のしやすい普通高校へ。大学で一ランク上の技術を学び、少しでも優位な立場で社会に臨めばいい。

一億総進学熱。普通高校への進学を望む親と職業高校増設方針のギャップ。それは競争をますます激化させ、一流大学へ入りさえすれば一流会社に入社でき、豊かな生活が手に入るという神話が一般化した。「学歴が唯一」の価値観は、子どもにも広がる。世間に煽られ親が煽り、能力以上の無理をする子どもも現れる。無理はいつしかひずみに変わり、枠からはじかれコン

プレックスのかたまりとなった子どもたちと、ひずみを抱えた子どもたちの心は荒れた。行きどころのないストレスと将来への不安が非行を産み、果ては校内暴力、いじめ……。

学校が荒れるとき、家庭が揺らぐとき、古い体質の政治家が考えることはおかしいほど同じである。

一九八二年、中曽根内閣は経済大国となった日本の「国際国家化」を打ち出し、内閣によって一九八四年に設立された臨教審は「愛国心教育」と「日本人の誇り」を強調。日本人としてのアイデンティティを確立せねば、と強調する。一九八五年文部省が徹底を求めた学校行事での日の丸掲揚と君が代斉唱はその具体的な表現であり、加えて学校の国への忠誠度を測るリトマス試験紙の役目をも担っていた。

同じころ、財界人も考えた。「日本のGNPを押し上げる産業戦士の養成に、教育は非常な成果をもたらしてくれた。しかし、薬が効きすぎた。自分でプランを考え、独創的な企画を生み出す、そんな人間がいなくなってしまった。企業トップの危機感がそこにある。もっと個性豊かな人間を育てる教育をして欲しい」（著書「教育改革、私ならこうする」より）

教育荒廃は元をただせば、経済優先の政策が作り上げたもの。一歩を譲っても、教育の責任はそれを取り仕切ってきた国にある。それには一切ふれず、これまで愛国を強制し、従順な産業人を望んだ財界が今度は個性を叫ぶ。

だいたい、現実は「アイデンティティ」どころの騒ぎじゃない。各界トップたちが胸を張る経済大国の、将来を担う大切な学校は、八〇年代の半ば、すでに教育の場ではなくなっていた。

只今、教育改革真っ最中

一方では学校に対する「管理強化」をすすめ、他方ではカリキュラムの「自由化」に拍車をかける。この二つの矛盾した政策を進めようとしているのが、中曽根首相時代以来の国の教育政策の基本にある。

いじめ苦自殺が相次いだ一九九四年は長い年月をかけて練り上げられた、新しい改革の本格的な実施が始まった年。「個性重視」と「生きる力を養うこと」が提案された年でもある。

今回は、今までの「みんな平等」を強調した画一的な教育と打って変わって、個人の適性と希望を尊重する「真の平等」を推進。

「学びたいことを学び、興味を伸ばす」「生涯教育の受け皿」「学校格差の意識緩和」の一石三鳥を狙った高校の多様化も勢いづいてきた。改革の理念は学力テストの結果より意欲や関心、態度を評価して「心豊かで主体的に生きる」人間の育成を目指したもの。

言葉のまま素直に読む限り、改革に非の打ち所はない。実際は具体性に欠けるぶんだけ雲を掴むような話で、「何をどうしたらいい？」と教育現場は大混乱。

何より混乱を招いたのは、学校から偏差値が廃止されたことだろう。

脱偏差値元年を迎えて

脱偏差値の火付け役は、埼玉県教育委員会元委員長・竹内克好氏。

○希望や適性よりペーパー学力を重視する高校選びが生徒のやる気をなくし、退学者を増やす結果を生んでいる。

○偏差値の輪切り教育が学校間格差を増大。底辺校の子どもたちは学力だけではなく、人生すべてに自信を失っている。

○数字が横行する教育のせいで画一的なことは得意でも創造力のない、自主的に判断も行動もできない人間を育てた。

○知の完成がすべてで、徳や体の訓練ができていない。

などなど、多くの弊害を並べ、「臭い匂いはもとから絶つ」とばかりに一九九二年一〇月、学校現場での業者テスト廃止を打ち出した。

しかし、偏差値重視は長きに渡り続いてきた進路指導法。そう簡単に方向転換できるはずもなく、提示を受けた埼玉県の学校はてんやわんや。そのうえ、偏差値提示が廃止になっても、それを必要とする私立高校の「青田買い」が消える気配はまるでない。

一流の私立高校と言われる所以は、学力優秀な生徒が集まり、一人でも多く有名大学に入学すること。その実績がさらに学力の高い生徒を呼ぶ。推薦入試はそんな生徒を一人でも多く確保するための大事な試験。その要となる生徒を、学校間で学力に開きがある中学校の、独自のデータで決めるわけにはいかない。私立が欲しいのは業者テストでしかはかれない、県の学力優秀生徒なのだ。

中学校にとって一番重要なのは目の前にいる生徒。親も教師も偏差値の提示で入学できるのなら、そうしたいと考える。ましてや、他の学校が提出しているかも知れないのに、どうして自分の学校だけ出さないでいられよう。

県外の高校となれば問題はさらに大きい。いくら教育委員会の決定でも、埼玉の子どもが損をするのでは割が合わない。実際、偏差値提示がなければ、と高校に門前払いを受けた中学もある。

廃止の時期もまた悪かった。私立高校と推薦の事前相談が始まるのは秋の業者テストの結果が出る一一月中旬過ぎ（関東地区の本当の相談解禁日は一二月一〇日だが）。一〇月の廃止はあまりにも唐突過ぎる。

こうして、学校同士が牽制しながら、事前相談も偏差値提示も当たり前に起きた。

竹内教育長の決意は固かった。この状況を非難して「偏差値は永久に私立高校に提示しない」と方針を強調。

この強気の裏には、同じく偏差値の弊害を訴えていた当時の鳩山邦夫文部大臣の顔が浮かぶ。

竹内教育長の著書、「なぜ私は業者テストをやめさせたのか」のなかで、鳩山文相は彼を「教育界、子ども界の救世主」と持ち上げ、文部大臣としてエールを送っている。

偏差値草

偏差値があるから学歴偏重が生まれたのではなく、学歴偏重があるから偏差値が浸透したのだから、脱偏差値が勝利を得れば学歴偏重社会が揺らぎ始める、とは甘すぎる推測だと思うのだが……。

しかし竹内教育長は、「役人生活の締めくくりに、あえて手をつけた。最初から勝算はあった」と翌年の定年退職を期に語り、返す刀で「偏差値教育を生んだのは子どもに手間をかけたくない、子育ての自信がない親の『下請けまかせ体質』」と超辛口の批判も飛び出し、「子どもの進路を数字や学校にまかせて、それでも親か」「しつけは親の責任。それを学校に押しつけるから、しつけのプロではない学校は校則でしばるしかなくなる」「子どもを自立させられない、させたくないダメ親」など、著書の中で親を一刀両断に。子どもの不祥事、学校荒廃、果ては学歴偏重、偏差値まで親の責任とし、脱偏差値の功績を勲章に堂々と勇退した。

動かざるをえないのが文部省。埼玉の実績と鳩山文相の強い後押しに引っ張られ、一九九三年、脱偏差値は全国へ広がる。

だが、反応はいずこも同じ。親や教師の願いは少しでも学力の高い高校への入学。一歩を譲っても、「とにかく高校へ」がある。

確かに偏差値なしで進路相談をやっていた時代もあるが、そのころとは受験戦争のスケールが違う。

人気の高い私立高校には多くの地域から子どもが集中する。中学校独自のデータは結局、何の役にも立たないから、学校名を数値が決めてくれる偏差値は進路相談になくてはならない便利な資料なのだ。

突然の変化に親はピリピリ、教師は物差しのない判断に自信がない。それを肌で感じる子どもは入試が不安になる。

かくして、「学歴社会が変わらないのに偏差値だけをなくして、何の解決になる」「ポスト偏差値が見つからない」と現場サイドは慌てふためいた。

業者テスト会社はもっと深刻である。どんな騒ぎになっても中学校はつぶれないが、こちらは死活問題と直結している。業者テストをなくす訳にはいかない。必死で生き残りの道を探る。

脱偏差値は、あちらこちらの事情を巻き込んで大騒ぎとなった。

しかし、今回文部省は強かった。「おかみ」の指導に現場は勝てない。「直ちに追放」の通達のもと、現場の混乱は一気に下火へ向かう。

かくして、教育現場に君臨し続けた偏差値は、ものの一年で学校から消えた（はずだった）。

偏差値はよみがえる

そう、偏差値と言う言葉は消えた。確かに偏差値も消えた。「おかみ」の見える所からは。

偏差値がなくなって、何が一番変わったかと言えば教師の業務量。

「現場がどんなに大変になったか文部省には分からないのよね。そうでなくても事務の仕事が多いのに、手づくりのテストづくりに追いまくられて……」

と語るのは大田区内の公立中学の教師Tさん。

しかしテストを手づくりしても結局それは学校内でしか活用できないものである。

ほかにもポスト偏差値現象はいろいろある。隠れて業者テストを行う学校が出たり、業者テストの切り貼りで私製テストを作ったり。

「なるべく外の業者テストを受けに行くように生徒たちにはすすめているんだけど、行くのはやっぱり一握りの生徒だけ」

Tさんの中学は偏差値が五〇を切るいわゆる「底辺校」。「進学校」では事情は逆転する。しかし、これまで行っていた学校間での一斉業者テストに比べてどこか心もとない。生徒が受験に失敗したら……、それを苦にやんでノイローゼ気味の教師も増えた。

となれば「学校より進学のプロ」との評判もある塾も黙ってはいない。学校が地域でのレベルをはかれないのなら、と学力に合う進路指導を行うところが現れる。

塾が自分の生徒の名簿を私立高校に提示、中学校が提出した独自の通知表と照らし合わせて入学を決める高校も出てきた。もう、子どもの進路を導くところは塾だか、学校だかわからない。

もちろん、高校側だってこの実態に手をこまねいているはずはない。生徒の絶対数が少なくなっているから「青田買い」はさらに激しくなる。偏差値の提示がないぶん高校は中学校そのもののレベルを自分たちではかり、中学校から提出された生徒のデータにそれを追加するらしく、入試の合否は前よりずっと不透明になった。

さすがにここまでくると中学校も疲れてきた。ここでフェニックスのようによみがえったのが「偏差値」である。

業者テストのようであって、業者テストではない。偏差値はでるが、表向きは偏差値でない。裏口からひっそりと、だけど確かな存在感で学校に現れたモノがある。

「文部省は知ってますかね。うちの学校では〝復習確認テスト〟って言ってます。学校によって名前は違うと思いますが以前の業者テストと全く同じものです」（匿名希望・中学教師）

これを業者から各中学校が購入し、生徒に受けさせる。その結果が数値化され、教師

たかが内申書、されど内申書

もう一つ、今回の改革で大きく変わったのが入学試験時での内申書の比重。多くの人に「生徒の態度や関心を、教師が正当に評価することが可能か」と非難を受け、これが子どもを萎縮させると親が考え、改革の大問題として指摘されていたものだ。

今、生徒への教師の権限はこの書類に集中していると言ってもいい。世の中、よい先生ばかりではない。実際、授業に自信のない教師は「内申書」をたてに生徒をおどしつけている。

偏差値が「廃止」されてから、この状況に拍車がかかったのはたしかである。

評価のためのボランティア活動や地域の行事参加もあるらしく、クラブ活動もその一環で続ける子どもが多いとか。「ひとつのことに打ち込み、最後まで頑張る」の評価が欲しくて、子どもは毎日忙しい。なかには、「いい子になって、いい内申をもらって、推薦を受ける」ということを「今年の目標」として書き出す「素直な」子どもも現れる始末。小中学生が異常に礼儀正しい「あいさつ通り」なる名所も各地に現れている。

世間がそうさせるのか、子どもが損得を自分で学ぶのか、何事にも一方向へ傾きすぎる日本人の特性がすべてをエスカレートさせていく。

だが、実のところ、内申書は教師にとってそれほどの武器にはなっていない。

何しろ学校は、一人でも多くの子どもに高校へ入学してもらわないと困るのだ。それが教師の責任であり、学校の評価に繋がる。そして、そうそう自分の生徒を宙ぶらりんの状態にしたいと思っている教師はいないだろう。

何より、いつどこで内申書の「開示」を求められるかわからない。これは大きい。問題ある内申書を開示されたら、それは困る。万が一を考えると、そう変なことを書けるはずもない。そのうえ、内容がえらく細かくて「学習」「生活」「性格」「総合所見」なんて欄がぎっしり。いい加減、書くこともなくなるから、どこかきれいごとの羅列になる。まさに、内申書で萎縮しているのは教師も同じ。

今、教師は結婚式の挨拶みたいな褒め言葉を並べる書類作成に日夜、努力を続けている。

教育改革の行方

改革一年半が過ぎて、教師は以前より忙しくなった。はっきり進路を確定できない学校は大切な裏情報として進路相談の目安に使っている。生徒はただのテストとして受けているし、自分の偏差値も知らされていない（偏差値廃止となっている今、学校側もそれを伝えられない）。

この状態を脱偏差値と言っていいものか？　取り敢えず業者テストの名前は裏へ隠れ、文部省は偏差値廃止の結果に自信満々。結局、本質はなにも変わっていないことを知っているかどうかは、分からない。に代わって、塾が勢力を拡大させた。

それでは、子どもは……。いろいろな生徒がいるから一括りにはできないが、子どもの行動が分かれ始めた、と言う。

偏差値が目に見えなくなっても、高校や社会にランクがあることは何一つ変わっていない。結局、最後が変わらなければ、途中経過がどうなろうと何も変わらない。進学に期待を持っている子どもは偏差値というはっきりした目標や安心感が見えなくなったぶんだけ焦り、前以上に勉強し、他地域とのレベルがはかれる塾を頼りにする。

そうでない子どもは、偏差値追放を素直に喜んだ。年四回から六回もあった業者テストを受けなくても済み、叱咤激励の対象となる数値が見えなくなり、数値へのコンプレックスも取り除かれているのだろう。テストのたびに認識しなければならなかった進路が気にならなくなり、彼らは前よりずっとのんびりと（のんびり過ぎるくらい）学校生活を送っている。

それが本人のために良いのか悪いのか。学歴偏重がまったく変わらない世の中で、その行動が将来どんな実を結ぶのかは、わからない。ただ、ひとつだけはっきりしているのは、学力の高い子どもはもっと高くなり、勉強をしない子どもはもっとしなくなったということ。結果として子どもたちの学力格差とそれに伴う学校「格差」はどんどん広がりつつあるのではないだろうか。

「個性」と「自己選択の尊重」、「自分の行動のリスクは自分で背負う」の結果は、勉強ぎらい？の生徒たちの上に、どのような効果をもたらすのだろうか。この状況が彼らに「生きる力」を養い、「心豊かな現実」を与えているとは、どうしても思えない。

偏差値廃止は、財界が望む「ハイタレントの養成」にもっぱら役立っているような気がするのは私だけだろうか？

これから、子供たちはどう変わっていくのか。それがどう日本の将来と結びついていくのか。それを考えるのは恐ろしい。

七月の参院選では、驚くほど棄権が多かった。人々は再び「政治」に白けはじめている。投票した人も、しない人も、政治についていま、何を考えているのか。

今年五月、参議院選挙を前にして、「政策を提言する女性の会」が行った「国政選挙における女性の投票行動に関するアンケート」。女性の投票行動について、さまざまな面白いデータを提供してくれている。

まじめな浮動票はどこに行く

Q１．あなたは国政選挙にいきますか（１つに○印を）
①必ず行く　②ほとんど行く　③ときどきしか行かない
④ほとんど行かない　⑤全く行かない

Q２．Q１で③〜⑤を選んだ方はその理由についてお答えください（１つに○印を）（①と②を選んだ方はQ３へお進みください）。
①自分の１票では世の中が変わらない
②政治家は公約を守らない　③魅力的な政党がない
④魅力的な候補者がいない　⑤時間がない
⑥何だかおっくうなので　⑦支持できる女性の候補者が地域にいない
⑧政治というものが自分に関係あると思えない
⑨世の中いまのままでよいと思う　⑩その他

Q３．国政選挙で投票するとき，あなたは政党と候補者のどちらを重視しますか（１つに○印を）。
①政党　②候補者　③時による

Q４．あなたがもしある政党を支持するとしたらその最大の理由は何ですか（１つに○印を）。
①政策　②清潔さ　③政治勢力のバランスをとるため
④夫が支持している　⑤昔から家族ぐるみで支持している
⑥知人に頼まれた　⑦その他

Q５．あなたがもしある候補者を支持するとしたら最大の理由は何ですか（１つに○印を）。
①政策　②清潔さ　③政治勢力のバランスをとるため
④夫が支持している　⑤昔から家族ぐるみで支持している
⑥知人に頼まれた　⑦イメージ（ポスターなどの）が気に入った
⑧ＴＶでよく見て知っている　⑨候補者を個人的によく知っている
⑩その他

Q６．あなたが投票するときは，どんな情報を参考にしていますか。以下の番号の中から重要な順に３つまで選び，右の（　）内にその番号を記入してください。
①選挙広報　②新聞報道　③ＴＶ・ラジオの政見放送　④ポスター
⑤当日投票所に張り出された一覧表　⑥ＴＶなどでの平素の発言
⑦当人の著書　⑧知人からの口コミ　⑨候補者の出している通信
⑩当人を見て　⑪選挙の街頭演説　⑫宣伝カーでの連呼
⑬その他（具体的に：　　）

Q７．あなたは国会に，どんなイメージを持っていますか（１つに○印を）。
①政治家の権力闘争の場　②官僚が実権を握っている場
③政治家の金もうけの場　④政治家が理想を実現するための場
⑤女性の生活に関係のない議論をしている場
⑥国民の各層の利害調整の場　⑦その他（具体的に：　　）

Q８．あなたにとっていま関心の強い問題は次のどれですか。以下の番号の中から関心の強い順に３つまで選び，右の（　）内にその番号を記入してください。
①高齢社会への対応　②開発や廃棄物による地球規模の環境破壊
③教育の場の過度の競争やいじめ　④女性の社会進出
⑤国際平和の維持　⑥さらなる生活水準の向上
⑦妻の身分にたいする法的保障　⑧雇用の安定　⑨憲法を守ること
⑩自然災害への対処　⑪時間的・精神的によりゆとりある生活

Q９．あなたが政治家にもっとも望むものは何ですか。以下の番号の中から重要な順に３つまで選び，右の（　）内にその番号を記入してください。
①市民の声に耳を傾ける姿勢　②長期的ビジョン　③強力な指導性
④弱者に対する配慮　⑤公約を守ること　⑥現実的なバランス感覚
⑦清潔であること　⑧地元の利益を尊重する姿勢
⑨その他（具体的に：　　）

Q10．どうしたらもっと多くの女性が，国政の場に進出できると思いますか（１つに○印を）。
①国会議員の一定の率を女性とするように法律できめる
②教育によって女性の政治意識を高める
③女性の社会進出をすすめ，自分たちの利益代表を国会に送りこめるようにする
④各政党が，もっと女性議員を増やすような党内政策をとる
⑤その他

Q11．あなたの支持政党は　①自民党　②新進党　③社会党　④公明党
⑤共産党　⑥新党さきがけ　⑦その他　⑧ない

最後に女性の政治参加について，お考えのことがありましたらご自由にお書きください。

「支持政党なし」は「無関心派」ではない！

さて、「支持政党なし」の人は実に多く、何と七五％もの人がそう答えている。

しかしこの人々のうち、選挙に「必ず」か「ほとんど」行くというのが八一％。

無党派層というのは、政治に無関心な人々ではない、ということがあらためて立証された。

ならば「政党ばなれ」はなぜ起こるのか。選挙に「ときどきしか」「ほとんど」「全く」行かない、と答えた人たちの理由を見ると、何よりもまず、「魅力的な候補者がいない」というのがダントツで一位、四三％。

「何だかおっくう」「自分の一票では世の中が変わらない」という白けっぽい答えが各一一％とそれに続く。

二〇代ではとくに、「時間がない」とか、「政治というものが自分に関係あるとは思えない」という答えの率が他の世代よりかなり高くなっているのが目につく。

求められているのは「政策」だ

そもそも人々は「候補者」と「政党」のどちらに重点をおいて選んでいるのだろうか。

アンケートによると、「政党」一八％、「候補者」三九％、「時による」四三％。

党に重点をおいて選ぶ人は年代が高くなるにしたがって増え、二〇代では候補者に重点をおく人がいくらか多い。

では「候補者」のどこに重点をおいて選ぶのか。

アンケートにはその鍵が隠されている。

「あなたがもしある候補者を支持するとしたらその理由は何ですか」という問いに、ダントツに高い答えは「政策」六二％。

「人」で選ぶ、といっている人も、選ぶ基準は「政策」なのだから、大きくは政党の方針によって候補者を選んでいる、といえるだろう。意外にも「清潔さ」は二位、はるかに下がって二〇％。

清潔だけが売り物で、政策に見るべきものがないのではダメなのである。「理想選挙」のかけ声だけでは票が集まらない、ということだろう。

イメージに弱い二〇代？

「夫が支持している」とか、「昔から家族ぐるみで支持している」から一票を投じる、という答えを選んだ人は実に少ない。ことに夫はたった一％。ちょっと目だつのが「ポスターなどのイメージが気に入った」という回答が、二〇代の人が七％と、他世代に比べると異常に高いこと。イメージだけで選んでいるとするとちょっとこわいな、という気がしないでもない。

選挙広報の使命は大きい

ところで人々は、実際に投票するときには何を参考にして一票を投じているのだろうか。

自分のことを考えてみても、これがなかなか、特定できない。

しかしここがアンケートの意味があるところで、数がある程度揃うと、少人数のときには見えて来なかった事実がはっきり浮き上がってくるのである。

一位「選挙広報」三三％。

二位「新聞報道」二〇％。

三位「TVなどでの平素の発言」。

四位「TV・ラジオなどでの政見放送」。

何となく、納得できる結果ではないだろうか。活字メディアの衰退が伝えられているが、やはり活字の持つ信憑性は大きい、とうれしくなる。

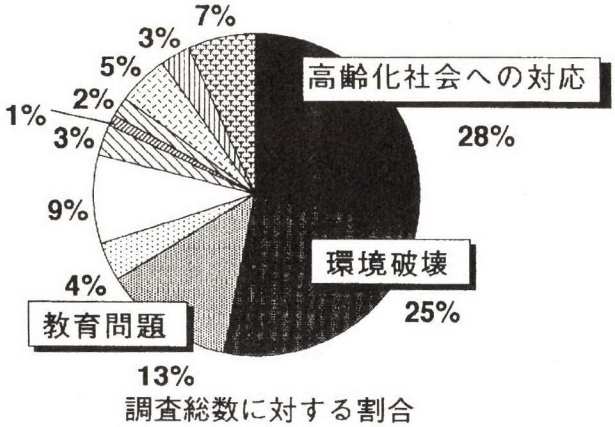
おかしいのは「宣伝カーでの連呼」を選んだ人はゼロ％で最低。まったく、あんなものやめちまえ！である。

国会のイメージは悪い

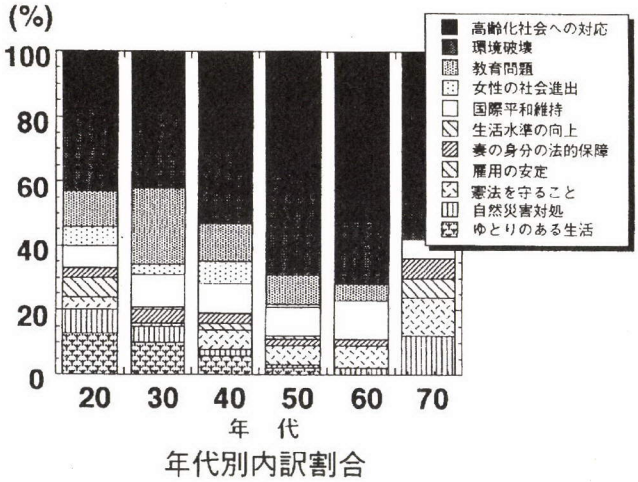
しかし悲しいかな、国会のイメージはかなり悪い。五一％の人々が、「政治家の権力闘争の場」と考えている。次に「官僚が実権を握っている場」一七％と続く。三位がはるかに下がって「政治家の金もうけの場」九％とつづく。

気になるのは二〇代でこの回答を選んだ人が他の世代の約三倍もあることで、これは何を表しているのだろうか。

Q５．候補者を支持する理由



調査総数に対する割合



年代別内訳割合

女性の関心事は？

あなたにとっていま関心の強い問題は？という問いへの答えは、上位から「高齢社会への対応」二八％、「地球規模の環境破壊」二五％、「教育の場での過度の競争やいじめ」一三％。

それぞれ、年代によって少しずつ差があるが、「環境破壊」にはどの年代も同じレベルで関心を示しているのが印象深い。

政治家に望むもの

感銘を受ける答えが出た。女性がいま政治家に最も望んでいるものは、「市民の声に耳を傾ける姿勢」四〇％なのであった。次に「長期的ビジョン」一八％。

面白いのは、「政治家を支持するとしたら」という問いに対しては二位だった「清潔さ」ははるかに下がって五位にとどまり、他の選択肢とどんぐりの背比べ。実際に一人の政治家を支持するときには「清潔度」が問題とされるが、理想の政治家に対して人々は、より高度、より複雑な資質を求めているということが表れている。

女性の国政進出について

「どうしたらもっと多くの女性が国政の場に進出できるようになると思いますか」という問いにたいし、「国会議員の一定の比率を女性にするように法律で定める」というクォーター制を支持する人は一九％と思いのほか少なかった。

一位は「女性の社会進出をすすめ、自分たちの利益代表を国会に送りこめるようにする」三五％、二位が「教育によって女性の政治意識を高める」二七％。

保守的といおうか、賢明といおうか。人によってはこの答えに物足りなさを感じるかも知れない。

女に投票しない女たち

最後に自由記述のところに、女性の政治進出を望む声とともに、その約三分の一の「何も女の議員でなくとも」という声が寄せられていたのは意外であった。

しかし考えてみれば、これほど女性議員の比率のひくい日本の現実は、女たちが現実に女に投票していないということを表しているのである。

このことは、男女不平等の日本の現実に、意外にも満足している女たちの意識のありかたを示しているのだろうと思う。

日本の特殊性は、夫が妻に財布のヒモを握らせてしまうことだ。子育て期こそ超多忙だが、子どもの手が離れると、妻は優雅にヒマを持て余し、夫は過労死寸前の働き方。

男女平等のかけ声は大きくとも、男なみの生活を心から望んでいる女などいはしない。これを「女の甘え」ときめつけていたことが今までの間違い。女の望むような「人間的労働」を実現することこそ、政治の目的ではないだろうか。

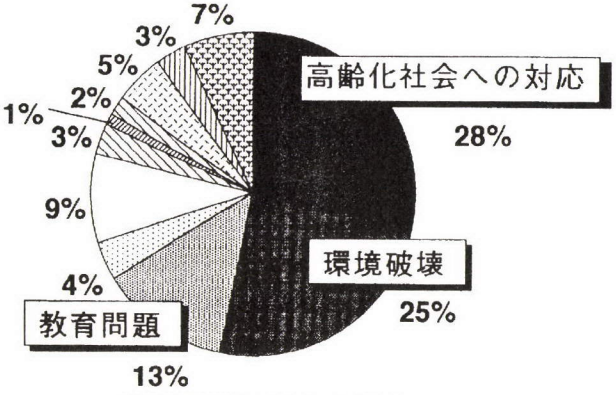
日本人の夫婦の抱える問題も、母親の子どもへののめりこみもここ一点を変えれば大きく変わるのである。

「まじめな浮動票」の行く先は、やはり女性議員へ…と思わずにはいられない。

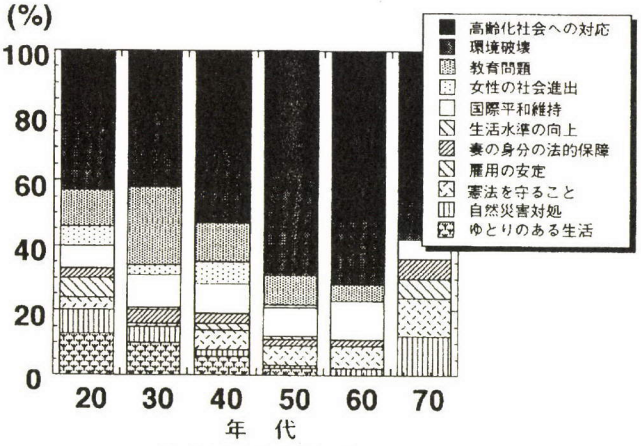
（まとめ・田中喜美子）

（紙面の都合で細かいデータを全部お伝えできないのが残念。アンケートの全集計をお望みの方は、お送りしますので編集部へお電話ください。A4判21ページです）

Q8．関心の強い問題



調査総数に対する割合



年代別内訳割合

回答者総計七二四人

●居住地区・東京都三四六人、他府県の都市三五七人、郡町村九人。

●年齢・二〇代一七％、三〇代二三％、四〇代三一％、五〇代一九％、六〇代以上七％。

●有職者六九％、無職三〇％。

●学歴・中卒一％、高卒二四％、短大・専門卒三〇％、四大卒四〇％、大学院五％。

右に見るように、回答者は、都市生活者の高学歴女性に偏っている。その前提の上でデータを読む必要はあるだろう。

読むBOOK!?

土居　健郎
渡部　昇一　著

いじめと妬(ねた)み

戦後民主主義の落とし子

和田　好子

呆れたコジツケ論が出たもので、今大問題になっている学校のいじめを、戦後民主主義が原因だなどと言っている本である。

かつて日教組は戦後民主主義をかかげ、「教え子を戦場に送るな」と平和教育に力を入れた。

その民主主義教育はなやかなりしころには、今のような深刻ないじめはなかった。

長年の抗争の結果文部省が勝って、民主教育なるものがゼロになった現在、いじめが盛んなのははたして民主主義のせいだろうか。

通読してみるとこれはコジツケで、著者の主張はいじめなどではないことが分かる。

目的は日本の戦争責任の否定であり、戦後平和主義の否定なのだ。これはくり返し出てくる主張で、それを言ったために辞職した大臣さえあり、言いたい人が相当たくさんいるのである。本書のコジツケ論もその一種にすぎない。

「あの戦争は、日本の自衛上やむを得ない戦いだった。一〇〇パーセント悪いわけではない」「植民地獲得はすべての資本主義先進国がやっていたことだ。なぜ日本だけが悪者にされるのか。日本が謝るなら、英米仏蘭みんな謝るべきではないか」

こんなところが彼らの主張の要約なのである。それから発して「日本が戦ったから植民地が解放された」とか「戦争裁判は勝者アメリカの一方的な処断である」といった主張がよく現れる。

戦後五〇年、こういう言論がちょこちょこ出てきて、その反論がまた「日本がすべて悪い、謝るべきだ」というものでしかないのは、あの戦争とは一体何だったのかについて、未だに定説が普及していない（学問的な研究はあり、定説は作られつつあるのだが）ためだろう。なぜ戦ったのか、なぜ敗けたのか、一般にはさっぱり分かっていないのである。

私は戦中派の一人としてこの五〇年、あの大国難はなぜ起こったのかについて、執念深く考え続け、現代史を読み漁ってきた。そうでもしなければ納まらない気持であった。あれだけの人死にを出して、うやむやの儘すまされてはたまったものではない。近頃ようやく見通しが立ったと思うので、それを書いて戦争擁護派への反論としたい。

日本は遅れてきた資本主義国であった。明治になって富国強兵のイデオロギーのもと欧米先進国と競争を始めたときには、すでに植民地は大方彼らの手に入っていた。

競争であるから同じコースを走るほかない。ロシアより先んじようと朝鮮から中国東北に手を出したのが始まりである。相手方もだまっていないから、日清日露の戦争となり、勝ったのが病みつきで植民地獲得に駆け出していく。

悪いことに植民地では民族的な抵抗が盛んになっており、欧米はそれと老獪に妥協しつつ、直接の武力行使をさける傾向になっていたが、日本は経験も浅くゴリ押しをして大いに憎まれてしまった。

ドイツも同様で、再分割戦争はついに世界大戦を二度引き起こし、二度めには欧亜ともに大破壊されて先進国は共倒れになった。

勝った方も満身創痍、とても植民地を争う路線はこれ以上続けられないとあって、パックス・アメリカーナが戦後を牛耳ることとなった。

ざっとこんな経緯だと思っているが、日本の悪いところはイデオロギーが古い……というより狂ったに近かったことである。

天皇神格化は一種のカルト宗教で、殺すのも死ぬのも恐れないという、オウムも顔まけの狂信ぶり。儒教がそれに変型されて混淆し、君に忠に親に孝に、女は男に従い、自由や平等は悪しき西欧の頽廃思想だなどと、余りにも時代と国際的常識に反した考え方にとらわれていた。それでいて富国強兵、植民地獲得はゴリゴリやる。この矛盾した独善性が、大いに憎まれた原因だと思う。

戦後もドイツ、イタリアがやったこと……戦争責任の徹底追究、国旗と国家を変えること、のどれ一つも日本はやらなかった。全く反省の色がないと思われるのは当然であって、自己正当化を計れば計るほど、憎まれることになろう。こんな本を出した人は、戦前の狂信思想を支持するのか？それが今忘れられているところに問題があるのだ。

読者のみなさまへ――お知らせとおねがい

▼誌代切れになっていらっしゃる方には、振替用紙を同封して継続をお願いしています。ご中止の方は、恐縮ですが必ず電話またはハガキで編集部までその旨ご一報ください。ご連絡がないと、ご継続としてそのまま送らせていただきます。

▼切手でのご送金は、事務処理上たいへんに手間がかかるということが分かりましたので、ご送金はどうぞ振替でお願いいたします。

▼お友達と回し読みをしている、というお声をよくききますが、お一人が一冊とってくださったらこんなに嬉しいことはありません。どうぞよろしくお願いいたします。

女の政治日誌

―七月から九月まで―

▼空前の低投票率を記録して、七月の参議院選挙は終わりました。予想のごとく社会党は惨敗。といっても組合依存のこの党の底力はまだまだ健在の部分があり、ほっと胸をなでおろしている向きもあるようです。

新進党の躍進の背後には公明党の猛烈な組織票があったと言われますが、共産党の堅実な前進に、この党の地に足のついた日常活動の確かさを改めて評価する思いです。

▼ところで今回の選挙、「争点がない、争点がない」と、マスコミの声が高いのですが、どうしてそんなことばかり言うのでしょうか。

争点がないどころではありません。

たしかに五五年体制のような、イデオロギーに基づく左右の対立はなくなりました。しかし各党の政策を細かくみていけば、基本的な差がばっちり存在していることがよく分かるのです。

▼私たちは選挙のとき、選挙公報を読み比べてみたりして、政策比較の手がかりにしようとします。しかしこのやり方ではダメなのです。

公報には、各党とも、いいとこ取りの目玉商品を並べています。そこでどこでも似たような言葉が並んでいて「争点」がなかなか見えてきません。つまりこのやり方は、相手の土俵にひきずりこまれてしまうからダメなのですね。

▼二月に発足した「政策を提言する女性の会」が、参院選の前に各党に五項目にわたる質問書を提出し、各党からその回答が寄せられていますが、こちらの質問に対する回答を比較して見ると、政策の差が実によく分かります。

質問書は「総論」「女性労働」「教育」「高齢社会」「環境」の五つに分かれているのですが、私たち市民に一番近い感覚の返事をよこしたのは「平和・市民」でした。もっとも遠いのは「自民党」で、とくに今日、女性たちがいつまでたってもうだつのあがらない第二市民の状況に閉じ込められているのは、長期政権の座にあったこの党の政策によることがはっきり読み取れるのです。

▼女は補助的労働者、若いうちはばっちり働き、三〇代は子育て、四〇代はパート、五〇代半ばからは老人介護、という性的役割分業に基づく女性のライフスタイルが定着している背後には、保守党の女性観が潜んでいるのです。そのスタンスが、回答からもはっきりと読み取れるのに驚きました。

▼社会党の女性政策は、基本的には男女平等の視点に立ってはいます。とくに回答の新味は、NGOと党の連携を謳いあげているところなのですが、今回社会党が脱皮しようとしている新党づくりへの呼びかけ人に、これまでかなり社会党寄りと見られていた、第一線で活躍している女性たちの名がまったく見られないのは、どういうわけなのでしょうか。その方たちに聞いてみても、呼びかけ人になってほしいという声はまったくなかったとのこと。タテマエとしては女性の味方を謳っていても、実際には女性を無視しているのではないか、という疑いが拭いきれません。

▼これに比べると、市民の声に耳を傾けるため、「政策を提言する女性の会」と継続的に懇談する機会を持ちたい、と回答してきた「さきがけ」のほうが実質的な誠意があるような気がします。

▼もっとも女性が第二市民としてとどまっている状況は、女性自身に好まれている節があります。「女に生まれたい」と答える女性の数は、年々増えているのですから。

▼しかし九月初めに法制審議会が出した答申で、有責者から離婚申し立てが五年の別居で認められることが確実となり、妻の座はますます揺らいでいます。夫婦別姓もいよいよ本格的に認められることとなり、女性の自立は法的には確実に進みつつあります。

一方では妻の座に与えられていた保証は着々と外され、他方では世界にも例のない差別的な低賃金。それでも女たちがパートに甘んじているのは、余りにも非人間的な労働現場への参入がためらわれるからなのです。この現実を変える政治をつくり出したいものですね。

一貫性のない自民党の政策は、いつまで続くことやら、です。

季刊　ファム・ポリティク（政治的女性）一九九五年秋号（通巻九号）　一九九五年九月二十八日発行　●編集・製作／わいふ編集部　絵／西田淑子　表紙レイアウト／林佳恵
発行人／田中喜美子　発行所／（株）グループわいふ　〒一六二　東京都新宿区矢来町一一五－四〇六　☎（〇三）三二六〇～四七七一　FAX（〇三）三二六〇～四七七三
定価三〇〇円　送料九〇円　年間購読料四冊分送料共一五六〇円　市販しておりませんのでご注文は直接編集部へ　郵便振込先〇〇一七〇－〇－七一八三〇五　ファム・ポリティク編集部